

「まったく、市民の皆さんはおまわりさんに頼りすぎなんだよなあ～」  
タバコをふかしながら、犬獣人の女性警察、ワーリは誰に言うでもなくひとりごちた。  
どうにも、ならずものの親分カシダとその子分のハック・リック兄弟が街をうろちょろしては帰っていきらしい。  
そこで、警察のワーリがアジトのあるほら穴洞窟へと足を運んだというわけだ。

「しかし、カシダもなんでこんなところにアジト作るかねえ。魔物もいるっていうのに」  
カシダがアジトを張っているほら穴洞窟は、魔物除けの結界の効力の及ばない場所にある。  
洞窟らしく、みみずやらもぐらやらの姿をした魔物が、侵入者に襲い掛かってくるのだ。  
「そらよっと！」  
電気の魔法を宿した魔法の警棒でワーリは襲い来るミミズの魔物を軽くあしらう。  
彼女も荒事に遭遇しやすい職業。  
洞穴洞窟の魔物程度は軽くあしらえなければ話にならない。

「む……」  
なにか、引っかかる気配。  
魔物の気配がない。それが逆に怪しい。  
「もうちょいバレないようにしなよ。おまわりさんの目はごまかせないぞ～」  
あたりに転がっていた大きめの石を手のひらに納めて、怪しい場所に投げ入れる。  
すると、石が当たった地面が沈んだ。  
どうやら掘った落とし穴に地面と同色の布を被せてあったようだ。

「ぐるるるる」  
ワーリがしばらく進むと、現れたのは黒い三つ首の獰猛犬。ケルベロスと呼ばれる魔物だ。  
「やあ、カシダのこの新顔かい？ カシダに話があるんだが、通してくれると助かるよ」  
「ぐるあああ！！」  
三つの首が同時に前に動いて、ガチンと牙を鳴らした。  
どうやら、門番もとい番犬のようだ。  
「めんどくさいのは嫌いなんだけどなあ」  
ぼやきながら、ワーリはケルベロスの三つの顎下に潜り込み、電気警棒を振って横撫で状に線を引き出した。  
纏った電流がケルベロスの三つ首全てをびりびりと痺れさせる。  
ぎゃうん！と吠えて、ケルベロスは沈黙した。

「まあ、殺しはしないよ。カシダもあれで根は悪くないやつだ。必要だから君を置いてるんだろ  
う。というわけでカシダ。犬のおまわりさんだよー」  
布切れ1枚で塞がれていた穴に入り込み、ワーリはその住民に気さくに挨拶をした。  
小柄なハーフリックの兄弟ハック・リックと大柄な人間の親分カシダだ。  
カシダの方はどっしりと構えてワーリをにらみつけているが、ハック・リック兄弟は慌てている様子。  
「あわわ！ ポリ公だ……」  
「どどどどうしやしょう、親分！」  
「落ち着け、お前ら。ワーリ、なにをしにきた」  
慌てる子分たちをなだめて、カシダがワーリに目的を問う。  
ワーリは簡潔に要件を話した。  
「市民の皆さんから苦情が来てね。注意しにきた」  
「ほう。それで」  
「いや、それだけだよ」  
「え！？ 捕まえに来たとかじゃなのか！？」  
「捕まえて欲しいのかい、リック？」  
「いやいやいやいや！」  
はあ、とカシダはため息をついた。  
「あまりからかってやるな。わかったよ、注意受け取った。しばらくはな」  
「受け入れどーも。それからこれは、私の忘れ物だ」  
ワーリは懐から小袋をハックのもとに投げ入れる。  
それをハックが確認すると、そこには相応の額のお金が入っていた。  
「親分、これって……」  
「ふん、悪いおまわりもいたものだ」  
「なに、キミたちが金に困って盗みでもしたら仕事が増える。それに」  
バレなきゃいいんだ。と小さく呟いたワーリはタバコに火の魔法をつけて、煙をふかして来た

道を引き返すのだった。  
「ありがとよ。ここは禁煙だがな」  
ワーリはもう、カシダの言葉が聞こえない位置にいた。